

1. 公開講座・公開授業の実施状況について ～全国国立大学生涯学習系センター研究協議会加盟校の動向～

【表 1. 公開講座数】

0～19 (講座)	10 (大学)
20～39	10
40～59	3
60～79	2
80～99	1
100～119	0
120～139	1

【表 2. 公開授業数】

1～29 (科目)	5 (大学)
30～59	4
60～99	3
100～149	3
150～199	2
200～299	1
300～399	0
400～499	1
無回答	4

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が発足して30年目にあたる昨年、加盟27校の公開講座および公開授業の実施状況について、昨年度当番校の大阪教育大学が調査を行いました。その結果の一部を紹介します。他大学の動向を踏まえた上で、本学における今後の方向性を考える一助として頂きたいと思います。(なお、データはいずれも平成20年度です。)

表1は子どもや社会人を対象として開講する「公開講座」の実施状況です。平均講座数は約33講座となっています。(最小数は8講座、最大数は133講座。)本学は毎年35講座前後を開講しています。大学の規模が様々なので単純に比較することは難しいのですが、多からず少なからず、平均的な開講状況と言えそうです。

表2は正規の学生を対象として通常実施している授業を公開する「公開授業」の実施状況です。公開授業に関しては、加盟27校中23校が実施、4校が未実施であり、表は実施校のみの状況です。本学の20年度の公開授業は15科目でしたので、実施校の中では少ない方に位置します。そもそも正規の学生を対象に行う授業を公開するにあたっては、様々な課題が想定されます。一方で、公開講座から公開授業にシフトする大学も見られるなど、公開授業は大学開放の方法の一つとして模索されています。

2. 日本初の大学公開講座～センター担当教員の研究・実践紹介(8)～

前号では、香川大学公開講座の起源が大正時代に設立された高松高等商業学校(経済学部の前身)にあることをご紹介しました。では、そもそも日本の大学がはじめて公開講座を行ったのはいつ頃のことでしょうか。

この問いに答えるのは少々やっかいです。まずは「大学公開講座」をどのように定義するか、そこから始めなければなりません。本欄ではとりあえず「大学公開講座」を、①大学(前身校を含む)において組織的に行われたこと、②ある程度継続されたこと、③公衆を対象にしたこと、とします。その条件に合致する最も初期の事例は、明治17(1884)年から実施された東京大学の“理医学講談会”ではないかと思われます。(ただし、私立大学については調査不十分のため、国公立大学に限ります。)

理医学講談会規則(全十条)の第二条は次のような条文となっています。

第二條 本會ノ主旨ハ理學醫學諸科ニ關スル事項ヲ平易ニ講談演説シ以テ公衆ヲシテ學術上ノ知識ヲ發達セシムルニ在リ

聴講は無料。初年度には合計9回開催され、毎回おそよ800人ほどの聴衆が駆けつけたとのこと。

これら講談会の筆記録は『東洋学芸雑誌』(イギリスの科学雑誌Natureを範として創刊された総合学術



誌)に随時掲載され、会場に行くことが叶わなかった人にもその内容が伝えられました。筆記録の中には「聴衆拍手喝采」「聴衆大に笑ふ」という但し書きが入っているものも見られ、大いに盛り上がっていた様子も伺えます。

理医学講談会は、その後明治20(1887)年に大学通俗講談会としてリニューアルされ、理科、医科のみならず、法科、文科、工科の教授の協力も得て、全学的に実施されるものとなりました。

ところで、ここで質問です。明治17年5月17日の“日本初の大学公開講座”のテーマは何だったでしょう？

講談会は二本立てで、一つは山川健次郎^{※1}「電信機ノ説」でした。日本の近代化を語るにあたり、欠かせないテーマの一つですね。では、もう一つは？

答えは……大澤謙二^{※2}「河豚毒ノ説」です！

残念ながらこの日の筆記録は『東洋学芸雑誌』には掲載されておらず、その具体的な話の内容までは分かりませんが、同誌は「極面白キコトナリ」と報じています。フグの毒に関して、どのような面白い話が展開されたのでしょうか？

※1 山川健次郎は物理学者、のちに東京帝大総長、九州帝大総長、京都帝大総長を歴任。

※2 大澤謙二は生理学者、日本の医学博士第一号。

文責:山本珠美(准教授)

3. 夏休み子ども向け公開講座がはじまります！ ～英国ランカスター大学の生涯学習への取組(2)～

香川大学は数年前から夏休みの子ども向け公開講座を拡充しています。幸い、ニーズの高さに支えられて、ほとんどの講座が募集定員を超える申し込みをいただいています。自分への投資をためらう親御さんも、わが子となると別のようなようです。大学のもつ専門性に裏付けられた「本物」に触れさせようと、親御さんが子どもを説得して参加させているということも漏れ聞こえてきます。

さて、英国ではちょっと事情は異なりますが、子どものための講座も準備されています。毎日大学へ通うスタイルもありますが、大学の学生寮に親子で宿泊して別々の講座に参加するスタイルにも人気があるようです。親子の触れ合いはもとより、避暑と学習の両方を満喫できる英国の講座への参加は知人ぞ知る英国大学の活用術なのです。そういえば、私が滞在していた10年前には、父親の研究のためにランカスター大学に来ていたクウェート人の母親と子どもが講座を受講していたことを思い出します。

子どもの受講する講座のいくつかを紹介すると、大学のスポーツセンターで多様なスポーツを経験できる講座、芸術や音楽、ドラマなどを体験するワークショップ、いろいろな素材や器具を使って行われるサイエンス教室、大学近郊の自然と向き合う探検教室(水辺の生物観察、滝巡り、農場訪問、ロッククライミング等)などがあげられます。日本の講座と比べて、大学周辺の自然環境を利用した体験学習が多くなっています。

大学が行う子ども向けの生涯学習事業はマージナルなものにとらえられがちですが、未来の学生、もっと先の成人受講生、と考えると、戦略的にももっと重視すべき分野なのかも知れません。【写真：H20年度「研究はじめての第一歩」】

文責:清國祐二(センター長・教授)



センター雑感

元ラグビー日本代表の大八木淳史さんとKSB放送の多賀公人さん、ふたりの客員教授とコラボレーションした「自己開発へのチャレンジ」(教養科目特別主題)が終わろうとしています。大学の授業らしくない授業でしたが、学生にとってはとてもチャレンジングで、またとない経験ができました。私としては通常の授業より大変でしたが、ちょっとした満足感と達成感に浸っているところです。次は何にチャレンジしようか…(清國)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧ください。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

1. 協働による公開セミナーの実施(報告)

生涯学習教育研究センターでは、今年度より(社)日本損害保険協会とのコラボレーションによる公開セミナーを開始しました。これまでの公開セミナー(野村證券(株)との現在も実施している連携講座:「やさしいマネー講座」)とは開講方法を変えて、保険についての学習がよりよい活動へとつながりそうな組織や団体等へのアウトリーチセミナー(出前講座)としました。日本では、保険への関心がまだまだ個人レベルで顕在化していないだろうと考えたからです。そこで今回は、高松市コミュニティセンターの職員を対象とした研修会へ2回、高松市PTA連絡協議会の役員を対象とした研修へ1回、計3回の開催としました。



本セミナー開催のきっかけは、法学部の肥塚肇雄教授からの紹介によるものです。(社)日本損害保険協会四国支部では生涯学習を通じた企業の地域貢献を、香川大学との連携で行いたいとの意向があり、生涯学習教育研究センターとして検討してもらえないか、という打診でした。そこで事務局長の鈴木文明氏から趣旨についてうかがい、今年度に関しては試行的にアウトリーチの形式で行うことで合意ができ、実施に移したしいです。

公開セミナー「そんぽオープンセミナー」

開講日	テ マ	講 師	連携機関・団体	受講者
9月18日	責任と補償の時代① ーコミュニティ行事と責任ー	鈴木文明* 清國祐二**	高松市生涯学習 センター	約50名
10月27日	PTA活動とリスク管理 ーPTA行事とリスクー	鈴木文明 清國祐二	高松市PTA連絡 協議会	約60名
11月20日	責任と補償の時代② ー災害とコミュニティセンターー	鈴木文明 清國祐二	高松市生涯学習 センター	約40名

* (社)日本損害保険協会四国支部事務局長・講師

** 生涯学習教育研究センター長・ファシリテーター

理不尽なことではありますが、ボランティアな活動であっても、何らかの事故が発生した場合、結果に対する責任がボランティアに負わされることがあります。万一に備えて保険に入っていたとしても、ケースによっては適応されない場合も出てきます。だからといって責任ばかり考えて、地域や団体の活動が衰退してしまえば、社会のつながりや活力を失うことにもつながりかねません。まずは、保険の基本的な考え方やメカニズムを正確に理解することが必要でしょうし、参加する側の責任を個々人にどう受け入れてもらえばよいか、改めて考えるきっかけとして欲しいところです。

今回のセミナーでは、保険に関する基本的理解をうながすとともに、自分自身のケースに当てはめることで実用的な学習となるよう編成しました。今回のような企業との連携によるオーダーメイドの出前講座は経験がなかったために、試行的なものとなりましたが、今後の新たな展開として一考の価値があるように感じました。学内で類似の取組などありましたら、情報をいただけると幸いです。

文責:清國祐二(センター長・教授)

2. 第31回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会(報告)

10月22日(木)23日(金)の両日にわたり、第31回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会(幹事校:岐阜大学)が開催され、本学からは山本珠美准教授が参加しました。文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課専門官・竹田和彦氏による「生涯学習振興施策の現状について」の講演ののち、2つの分科会にわかれて、センターにおける教職協働、および、公開講座の方向性について、意見交換を行いました。

3. 平成22年度公開講座の募集開始について

来年度の公開講座の募集を始めています。(ただし、開講できるのは原則香川大学の教員に限ります。)
開講ご希望の方は、「平成22年度公開講座実施要領」をご一読の上、平成22年1月18日(月)までに、「計画書」一部をセンター事務局までご提出下さい。
多くの方の意欲的な講座の提案をお待ちしております。

 申込先: センター事務局 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
問合せ先: センター長 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

4.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第15号』投稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを平成21年12月25日(金)までにセンター事務局または下記担当教員までご連絡下さい。原稿締切は平成22年2月1日(月)です。

投稿規定等の詳細につきましては、下記問い合わせ先まで、ご連絡下さい。

多くの方のご投稿をお待ちしております。(掲載された論文は電子化を行い、公開されます。)

 申込先: センター事務局 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
問合せ先: センター担当教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

<参考:第14号掲載論文>

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(3)	清國祐二(センター)
『三十年のあゆみ』補遺～高松高等商業学校における開放事業～	山本珠美(センター)
アンティゴネー像の解釈について	斉藤和也(経済学部)
『ロミオとジュリエット』における“passion”についての一考察	建畠正秋(学外講師)
『ファウスト』におけるオイフォーリオン悲劇について	中谷博幸(教育学部)
裁判員就職禁止事由に関する一考察	高倉良一(教育学部)

センター雑感

先日、香川県内のある会合で200人を前に1時間ほどお話する機会がありました。このような機会は時々あるものではありますが、今回は特に聴衆の方々ニコニコ顔しながら話を聞いて下さり、とても楽しく話すことができました。改めて、講座や授業では、「話し方」はもちろん、「聴き方」も重要と感じた次第です。(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

1. 公開シンポジウム「豊かな高齢社会の創出を考える」を実施します！

生涯学習教育研究センターでは、来る3月19日(金)に公開講座「豊かな高齢社会の創出を考える」を下記要領にて実施します。

昨年『案じますな、今じゃ:ひとり暮らしの高齢者26人の語り』(山愛書院)を出版された上杉正幸教育学部教授とともに、「豊かな高齢社会像」について考えます。多くの方のご参加をお待ちしております。

日 時: 2010年3月19日(金) 13:30~16:00
基調講演: 穏やかに たくましく 生きる
~ひとり暮らし高齢者の語りを通して~
講 師: 上杉正幸(教育学部教授)
鼎 談: 豊かな高齢社会像を語る
上杉正幸(教育学部教授)
宮本恵百((財)かがわ健康福祉機構専務理事)
清國祐二(生涯学習教育研究センター長・教授)
会 場: 香川大学生涯学習教育研究センター 第一講義室
参 加 費: 無料
定 員: 50名
申込締切: 3月12日(金)
申 込 先: 香川大学生涯学習教育研究センター事務局
電話 087-832-1273 FAX 087-832-1275
email syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

2. 特別公開講座「日本の国宝、仏像をたずねて」 ~徳島大学公開講座をe-learningにより香川大学で受講しました~

当センターでは試験的取組として、Polycomシステムを用いたe-learningにより、徳島大学公開講座を香川大学にて受講する「特別公開講座」を実施しております。

対象となった講座は、徳島大学の人気講座の一つである「日本の国宝、仏像をたずねて」(真鍋俊照、四国大学教授・第四番札所大日寺住職)です。2月2日から3月2日までの毎週火曜日、夜7時から8時半まで、全5回の講座です。今回は試験的取組ということで受講料は無料としたこと、また、このような仏教美術の講座を香川大学では提供していないこともあって、定員50名がいっぱいになるほどのお申し込みをいただきました。

教育学部313教室は、前方にスクリーンが2つ設置されています。写真のとおり、右のスクリーンには講師の真鍋先生、左のスクリーンにはコンテンツ(パワーポイントのスライドや、DVDの映像など)が映されています。

3回目まで終了しましたが、現在までのところ大きなトラブルもなく、順調に進んでいます。次年度以降どのような取組ができるかどうか、今回の試験結果を踏まえながら検討していきたいと思っております。



3. 出張報告～英国を訪ねて～

本年1月に、科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)を利用してロンドンに出張しました。研究課題名は「冒険遊び場におけるリスクマネジメントに関する研究」です。ロンドンの冒険遊び場(Adventure Playground)はデンマークで始まった冒険遊び場の影響を強く受けて、第二次世界大戦がヨーロッパで終結する頃、戦災跡の廃墟で始まりました。今年で65年を経過することになります。時代は移り変わり、怪我や事故に関する認識も大きく変わりました。遊具等による事故が訴訟につながるようになり、遊び場を継続させるためにはリスクマネジメントが不可欠の要素となりました。



日本の遊び場が思うように広がらないのは、ひとえに責任問題です。子どもたちのためにという善意だけでは遊び場の運営はできないのです。そこで、ロンドンの遊び場から学ぶべきことがたくさんあるだろうということで、現地で観察とインタビュー調査を実施するにいたったのです。この部分を報告してもよいのですが、堅苦しくなりそうなので今回はやめておき、遊び場で「単純に」感じた子どもと子どもを取り巻く環境についてのみ書くことにします。

滞在期間が短かったこともあり、ロンドンプレイという冒険遊び場事務局と遊び場3箇所しか訪問できませんでした。印象的だったのは、ShadwellにあるGlamis Adventure Playgroundです。写真のMarkが私を受け入れてくれました。そこには3人のプレイワーカーが常駐していて、訪問日には子どもは30人程度しかいませんでした。マークによると、そこは貧困問題を抱える地域だそうで、育児放棄(ネグレクト)によって食事を与えてもらえない子どもたちがその時5人ほど遊びに来ていた、ということでした。

イギリスの青少年問題は10～20年ほど日本よりも先を歩んでいます。若年失業の問題、ニートの問題、薬物の問題、どれもいち早く社会の関心を集めて、対策が取られています。日本も確実にイギリスの後追いをしているわけですから、何年後かの日本と重ねて考えると、ぞっとする思いがしました。ただ、それらに正面から取り組むプレイワーカーの存在は心強いものを感じました。(文責:清國祐二・当センター教授)



4. 大学公開講座がはじまった理由～センター担当教員の研究・実践紹介(9)～

明治17(1884)年に当時唯一の大学であった東京大学が「理医学講談会」を開始したことは前々号で述べましたが、これには3つほどの背景があったと思われます。

第一に、海外留学経験を持つ日本人教授たちが、留学先で公衆を対象としたさまざまな科学啓蒙の取組を見聞したこと。海外で行われている活動を日本でも実施しようと考えたことは、想像に難くありません。

第二には、大学の宣伝が急務であったことです。今でこそ大学とは何か、人々は一応の理解をしていると思いますが、明治10(1877)年に設立された当時は、それが何者であるか、社会に役立つものなのかどうか、海のものとも山のものとも分からなかったことでしょう。大学、および、そこで学ぶことのできる西洋型の学問の有用性を、世間に積極的に訴える必要があったわけです。

明治13(1880)年に集会条例が制定され、政治に関する事項を談ずる集会に官公私立学校の教員・学生が臨会・入会することが禁じられたことも、学術講談会というジャンルが確立する一因となりました。政府としては当時盛んだった政談ではなく、国家建設の基礎となる学術へ人々の関心が向くことを望んでいたのです。これが第三の要因です。このような背景によって、我が国の大学公開講座は誕生したのです。

センター雑感

近年、文部科学省が先頭に立って「早寝 早起き 朝ごはん」運動を行っています。家庭の領域(私事)に教育行政(公)が入ることに違和感をもつ人もいるでしょう。一方で、「私の子ども時代はよかった」とうそびえているわけにもいきません。公と私を改めて問い直す必要を感じます。中央教育審議会のテーマも「新しい公共づくり」ですが、さて…(清國)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp